

二度の手術を乗り越え、
「スタイリストであり続けたい」という思いを貫いた



スタイリストの星

シリーズ 障害者の就労事例 17

KOTONONE
Series of Stories
vol.17

「メモボード」で、 ヘアスタイルを相談

鏡を見て、仕上がりに満足。目の前に置かれた「メモボード」を手にとって「いい感じですね!」と書いた。小川季男さんは、それを見てニコリ。「ありがとうございます」と言いながら、カットクロスを外してくれた。

神奈川県相模原市、JR相模原駅から歩いて一〇分、もとは米軍の補給基地があった場所につくられた「西門商店街」。基地の名残か、幅の広い道路の両脇に、昭和の匂いが強く残った店が並ぶ。その中に、二〇一五年、「ルピナスヘア相模原店」がオープンした。スタイリストの小川さんは、聴覚に障害がある。お客さんとのコミュニケーションは、「メモボード」のような筆談ツールを使って行う。

「ルピナスヘア」のオーナーの浅川雅之さんも、難聴者。子どもの頃、高熱による後遺症だった。健常者の二割程度の聴力しかなく、苦労したという。現在は手術を受け、七割程度に回復、日常生活には支障がない。浅川さんは、美容師の資格を取り、一九八四年に

お客さんとマンツーマンで接する美容師は、
高いコミュニケーション能力を要求される仕事だ。
難病に苦しみ、二度の手術の後で
ろう者になった小川季男さん。
コミュニケーションには大きなハンデを背負ったが、
「スタイリストでありたい」という強い思いで、それを乗り越えた。

理美容室を開設。その時から聴覚障害者を雇用した。さらに、昨年、聴覚障害者が運営までする店をつくろうと思ったきっかけになった出来事がある。
**スタイリストを目指す
ろう者が減っている**

「全国のろう学校で、理美容科があるのは、平塚と福岡の二校だけなんです。平塚ろう学校とは、以前からつながりがあったのですが、理美容科を希望する生徒が、だんだん減ってきている、という話を聞いて、なぜ減っているのか、いちばんの原因は、卒業しても、働く場所がないことだ。「何もサポートのな



編集部=文
text by KOTONONE
信澤邦彦=写真
photograph by Kunihiko Nobusawa